

## 館林キリスト教会

### デボーションノート（2009年）

11月 1日 今日の通読箇所 ホセア書 12章1～9

「先祖ヤコブ」

[3～6節]にイスラエルの先祖ヤコブのことが出ている。「ヤコブ」は「押しのける者」の意味で、よく彼の性格を示す名だ。彼は双子だったが、先に生まれようとして、兄の踵を掴んで母の腹から出てきたと言われた。そして弟なのにお人好しの兄を欺いて、父の財産を独り占めにしようと画策した。彼が生まれ変わったのは、ベテルで神のみ使いと争うという奇異な経験の結果だった。そこで、人を押しのけ自己を主張し、自己の利益のみを貪るのは、実は神に対して争うことだと気がついた。彼はベテルで悔い改めたのである。そして「イスラエル＝神のプリンス」という名前をいただいた。ホセアは言う。彼の子孫は、悔い改める前のヤコブ同然だ。先祖に習い、悔い改めて「真のイスラエル」になりなさいと。

11月 2日 今日の通読箇所 ホセア書 14章1～9

「言葉のささげもの」

先日の礼拝でも「悔い改め」がいかに大切かということをお話した。ここに「イスラエルよ、あなたの主、神に帰れ」と言い、「言葉を携えて主に帰って言え」とあるのはそれである。今まで背いていた心を神に向け、罪の悔い改めを自分の言葉で申し上げるのは、最初にしてかつ最高の「神に対する供え物」なのである。詩篇51篇にも「神の受けられるいけにえは砕けた魂です」とあるとおりだ。[2,3節]にその悔い改めの言葉がある。そこに「くちびるの実をささげる」とあるのは、「口先だけでなく、実行をもって」ということだろう。たとえば酒を悔い改めた人が酒の道具を捨てるようなものだ。神はこの祈りを喜び、直ちに受け入れて下さる。[4節]に「わたしは彼らのそむきをいやし、喜んでこれを愛する。わたしの怒りは彼らを離れ去ったからである」とあるとおりだ。何という尊いことか。

11月 3日 今日の通読箇所 ルカによる福音書 10章1～16

「収穫は多い」

イエス様は、12使徒とは別に町や村へふたりずつおつかわしになり「収穫は多いが、働き人が少ない。だから、収穫の主に願って、その収穫のために働き人を送り出すようにしてもらいなさい。…」と言われました。主は、人々が飢

え、渴き疲れ果てて救いを求めていることをだれよりも知っておられました。「目をあげて畑を見なさい。はや色づいて刈入れを待っている。」ヨハネ福音書 4 章 35 節、とも言われました。弟子たちは主のように人々を見ることができたのでしょうか。主はひとりひとりの魂の奥底の飢え渴きを知っていてくださる方です。あなたが主に求めれば、主はあなたの心に住み、生ける水が川となって流れ出るようにしてくださるのです。

11月 4日 今日に通読箇所 ルカによる福音書 10章17～24

「さいわいな弟子たち」

弟子たちの伝道旅行で最も印象的であったのは、悪霊を服従させたことらしい。「主よ、あなたの名によっていたしますと」、得意になって語っている。弟子たちの関心は、自分たちが神の国の民であるよりも、力あるわざに向けられていた。しかし主は、彼らが派遣された目的は「神の国はあなた方に近づいた」(9節)ことを人々に知らせることであると、ここで諭されている。旧約の時代は、神の御子から直接神の力も神の国の福音も聞くことは出来なかった。それを考える時、今イエス様といることの出来る弟子たちは、イエス様から与えられている、自分の名が天に記されている喜びと、神の国を知る特権に預らせて下さった主なるイエス様を喜び感謝するという、二重の喜びを与えられているのだ。

11月 5日 今日に通読箇所 ルカによる福音書 10章25～37

「良きサマリア人のたとえ」

「先生、何をしたら永遠の生命が受けられましょうか」(25節)という問いは、人間にとって最も重大な問いである。人々はイエス様に対して、この問いを一度ならず言っている。この箇所のほかに、同じルカによる福音書 18章18節から23節にも記されている。イエス様はこの問いに対して「律法には何と書いてあるか。あなたはどうか読むか」と逆に問い返している。すると律法学者は、神様への完全な愛と、隣人への完全な愛だと答える。しかし、そのように答えたものの、彼は自分が永遠の生命を持っているという強い自信はないのである。彼は隣人を限定しているからだ。彼は、イエス様から律法の記されているとおりに実行せよと言われると「では、私の隣り人とはだれのことですか」とさらに問い返した。そこでこの有名な「良きサマリア人のたとえ」を話されたのである。

11月 6日 今日に通読箇所 ルカによる福音書 10章38～42

「マルタとマリヤ」

イエス様と弟子たちはエルサレムの東、ベタニヤにやって来ました。そこには弟のラザロを含め三人姉弟の家がありました。旅の途中のイエス様たちをよくもてなす家庭でした。マルタはかいがいしくもてなしの準備をしました。しかし、忙しくして心を取り乱し、座ってお話に聞き入るマリヤをイエス様に言いつけ、イエス様にも憤りの気持ちを向けたのです。主は、マリヤがみ言葉に聞き入ることを取り去ってはいけないと諭してくださいました。マルタも心をみださず主を喜びながら準備に励むことも可能でした。それぞれの心が主に向いているかどうか、ということでしょう。マリヤは座って聞き入ることで、マルタも主に心を向けて仕えることで。

11月 7日 今日の通読箇所 ルカによる福音書 11章1～13

「祈り」

祈りなさい、求めなさい、と招いてくださる主の愛に、わたしたちは生かされています。父が子に良いものをくださるように愛してくださるのです。13節には「天の父はなおさら、求めて来る者に聖霊を下さらないことがあるか」とあります。祈りが答えられるのは素晴らしいことです。しかし、聖霊なるお方が豊かにのぞんでくださることはさらに素晴らしいのです。主は言われました。「助け主、すなわち、父がわたしの名によってつかわされる聖霊は、あなたにすべてのことを教え、またわたしが話しておいたことを、ことごとく思い起させるであろう。」ヨハネ福音書14章26節。主と共に歩む幸福に、主をお知らせできる幸福に、わたしたちは招かれているのです。

11月 8日 今日の通読箇所 ルカによる福音書 11章14～28

「神の言を聞いて守る人々」

イエス様は悪霊を追い出し、神の国は来たことを証明している。しかし敵対者は信じない。彼らはイエス様を中傷し、悪霊を追い出せたのは、悪霊のかしらとぐるだからだと言いつらす。イエス様はこれに対して「国が内部で分裂すれば自滅してしまい、また家が分れ争えば倒れてしまう」(17節)と、その矛盾を明らかにした。しかし彼らは全然聞く気がない。結局イエス様に自分を心から変革してもらいたいと思わない者は、悪霊が住みついてしまい、最終的にイエス様の臨在を感じる事が出来ず、自分の心の中より締め出してしまうことになるということだろう。こう話していると、一人の婦人が、イエス様を産んだ母親は恵まれた人だと賞賛をした。それに対してイエス様は「恵まれているのは、むしろ神の言を聞いてそれを守る人たちである」(28節)と教えられた。

11月 9日 今日の通読箇所 ルカによる福音書 11章29～36

「誰よりもまさった救い主」

人々はイエス様に向かって、お前が救い主なら「天からのしるし」(16節)を見せるように求めた。伝えられていた、天からの声か火の柱のようなものだろう。しかし、イエス様はこれを拒み、復活を予告された。その手法は旧約聖書にしるされているヨナやソロモンに起こった出来事を語り、悔い改めと信仰を求めるものだった。ヨナの宣教を聞いて悔い改めたニネベの人々、ソロモンの知恵を聞くために遠い国からやってきたシバの女王。彼らは共に、神の言を聞いて信じ救われた。しかし、今誰よりもまさった救い主がいるのに、人々は信じようとしないのである。33節からは、体が目に依存しているように、生命の光は心に依存している。だからイエス様は、聖霊によって内なる光がいつも輝いているように気をつけるべき事を諭された。

11月10日 今日の通読箇所 ルカによる福音書 11章37～54

「心の内にキリストの光を」

41節 42節のようにパリサイ人は形式主義に陥っていました。外側を整えても心の内の罪のきよめと神様に対する愛が欠けていけば空しく悲しいことです。うん香はみかん科の植物だそうです。44節、墓に触れれば儀式的に汚れるので目立つように墓は白く塗られていました。墓を避けて通りました。しかしパリサイ人の誤った教えは人目につかない墓のように知らないうちに人々に悪影響を与えている、ということです。46節、律法学者が作り出したたくさんの律法は、人々に重い荷物を負わせて苦しめているようなものです。そこから救い出そうともしないし、救い出す力もないのです。旧約時代の預言者をはじめ多くの預言者が殉教しました。彼らを記念して碑を立てますが、殉教させたのは彼らの先祖でした。彼らは今も、神様から遣わされた救い主キリストを排除しようとしています。現代においても自分自身も心の内にキリストの光が必要です。

11月11日 今日の通読箇所 ルカによる福音書 12章1～12

「おまけのすずめ」

おびただしい群衆がイエス様の周りに群がっていましたが、イエス様はまず弟子たちにお語りになりました。11章にも言われていたように、パリサイ人の偽善に気をつけなさい、と。神様はすべてをご存知で、明らかになるときがくるのです。マタイ福音書10章29節には二羽のすずめは一アサリオンで売られている、とあります。そして五羽のすずめが二アサリオンで買えました。一羽おまけになったようです。「その一羽も神のみまえで忘れられてはいない」のです。「その上、あなたがたの頭の毛までも、みな数えられている。恐れること

はない」(7節)と仰てくださる主なる神様が共にいてくださいます。「人を恐れると、わなに陥る、主に信頼する者は安らかである。」箴言29章25節。

11月12日 今日に通読箇所 ルカによる福音書 12章13~21  
「愚かな金持のたとえ」

ある人が、イエス様に遺産問題で助けを求めてやってきた。その時イエス様はたとえで「人のいのちは、持ち物によらない」ことを教えられた。その中でイエス様は、金持ちの農夫に対し「愚か者よ」と言われた。彼は常識のある成功者に見える。彼の仕事は人間が生きていくために必要なものだし、骨身惜しまぬ彼の労苦により豊作だったので、彼は穀物を貯えて将来に備えようとしたのである。彼が、自分の財産によって老後を安楽に暮らそうというのは賢い計画だ。それなのに、なぜ神は彼に「愚か者」といわれたのだろうか。詩篇14篇1節には「愚かな者は心のうちに『神はない』と言う」とある。彼の心には、自分が神様に生かされているという謙虚な気持ちが無かったからである。

11月13日 今日に通読箇所 ルカによる福音書 12章22~34  
「そんな小さな事さえ」

「そんな小さな事」が「だれが思いわずらったからとて、自分の寿命をわずかでも延ばすことができようか」を指しているとしたら驚くべきお言葉です。神様は寿命をも御手に治め、鳥を養い花を美しく装わせ「あなたがたに、それ以上よくして下さらないはずがあるか」と仰てくださり、必要を添えて与えてくださる方です。異邦人とは神様に信頼しない人々です。彼らが切に求めるのは生活にかかわる多くの事柄です。クリスマスの時、切に求めていた人々を思い起こします。貧しい羊飼いたちが求めていたのは、救い主のお生まれでした。高齡のシメオンやアンナも救い主のご降誕を待ち望んでいました。東方の博士たちが切に求めたのも、救い主にお会いすることでした。ホセア書6章3節には「わたしたちは主を知ろう、せつに主を知ることを求めよう。」とあります。

11月14日 今日に通読箇所 ルカによる福音書 12章35~48  
「目を覚まして」

イエス様の再臨は、主人が婚宴から帰宅する様子に譬えられています。ユダヤの婚宴は何日も続きました。主人が真夜中に帰ってくるのか、明け方に帰ってくるのかわかりません。そのとき「目を覚ましているのを見られる僕たちは、幸いである」と教えられています。また、盗賊が家に押し入る様子に譬えられています。盗賊が家に押し入る、これこそ、いつ、などと、だれにもわかりま

せん。「あなたがたも用意していなさい。思いがけない時に人の子が来るからである」とあります。忠実な思慮深い家令が主人を迎える幸いにも警えられています。「目を覚まして」再臨の主を待ち望むとは、日々、今、どのように生きることでしょうか。

11月15日 今日に通読箇所 ルカによる福音書 12章49～59

「火を地上に投ずるために」

聖書で火は裁きや試練をあらわす象徴として用いられてきた。神様はイエス様を人間の罪の身代わりとして十字架につけられた。この事は、時には人々に平和ではなく分裂をもたらすことになる。クリスチャンは自分の家族と仲良くやっていく必要があるのは言うまでもない。しかしイエス様は神様の裁きを身に受けて私たちを救い出して下さったという事実は変えられない。だからこの真理が明らかにされるために分裂が生じることがある。現代の終末的状况は、救い主イエス様を受け入れない所からきている。それを理解するのに最後の審判のたとえを語られる。ある人が裁判にかけられて役人の所に連れて行かれる。彼を待ち受けているのは有罪判決で、ひとたび判決が下されるなら、もう手遅れである。しかし神様は人々を罪から救いたいと願いイエス様を十字架につけられた。でも人々がそれを拒否するならば、尊い救いもその人にとっては無駄になる。

11月16日 今日に通読箇所 ルカによる福音書 13章1～9

「悔い改めの重要性」

イエス様の時代の人々で、不幸や災難にあうと、その人に罪があったから神様の罰を受けたのだと考える人がいた。ある時イエス様は、ガリラヤ人が殺され、その血が神殿の犠牲の血に混ぜられたり、シロアムの塔が倒れて、その下敷きで18人が亡くなった出来事を話された。この時イエス様は、その悲惨な実態を悲しむと共に、人はすべて自分の罪を悔い改めなければ同じように滅びると語られ、悔い改めの重要性を力説された。さらにイエス様は、いちじくの木のとえを語られた。ぶどう園とは私たちの世界、いちじくの木はイスラエルを示している。園の主人は神であり、園丁はイエス様。イスラエルは神に一番近い民族という自負のために実を結べないでいる。そのため主人から切り倒せと命じられる。しかしイエス様は一年の猶予を願い、彼らが悔い改めの実を結ぶのを期待する。

11月17日 今日に通読箇所 ルカによる福音書 13章10～21  
「恵みの世界」

主は、十八年も病気で苦しんでいた女の人を癒してくださいました。主はこの人について「アブラハムの娘」と言われました。主はザアカイについて「アブラハムの子」と言われています。アブラハムが神様を信じる信仰によって恵みにあずかったように、この人も、ザアカイも信仰によって主から恵みをいただきました。彼女は癒されたとき「神をたたえはじめた」のです。主に感謝しました。会堂司はこれが安息日だったので憤りました。しかし、その彼らも、安息日には、牛やろばを家畜小屋から解放して水を飲ませに引き出すのです。主は今も、悔い改めて主を信じる者を救い、サタンの束縛、長年の因習から解放し、恵みに溢れた日々へと導いてくださるのです。新しい命、溢れる恵みはからし種やパン種の様子に表されています。

11月18日 今日に通読箇所 ルカによる福音書 13章22～35  
「狭い戸口からはいるように」

イエス様が旅をしておられると、ある人が「主よ、救われる人は少ないのですか」と質問しました。イエス様は「狭い戸口からはいるように努めなさい」とお話になりました。続くみ言葉で分かることは、戸口が閉まる時が来ること、戸口を閉めるのは家の主人であること、「あけてください」「あなたと一緒に飲み食いし...あなたは...大通りで教えてくださいました」と言っても入れてもらえない、ということです。教会に行ったことがある、イエス様のことも聖書のお話も聞いたことがある、ということに留まらないで、救いの門が開いているあいだに、あなたのために十字架で死んでくださった救い主イエス様を信じることが大切なのです。

11月19日 今日に通読箇所 詩篇 111篇 1～10  
「知恵の始め」

「主を恐れることは知恵の始めである(10節)」という言葉はすばらしい。日本人は「学校マニヤ」といわれるくらい勉強が好きだ。あらゆる学校、教育機関は完備し教育産業は途方もないスケールに膨れ上がっている。その結果原子力や遺伝子まで管理対応するようになったが、さて自分自身の管理、家族の管理、また人生への正しい対応はどうだろう。それらの最も大切な点で失敗者が多い現実、教育が真の知恵の基礎を教えない事実を物語っている。

11月20日 今日の通読箇所 詩篇112篇1~10

「悪いニュース」

昔は「電報です」という声にどきっとした。今も深夜の電話などはいやなものだ。我々は悪いニュースに脅えている。ここに神の保護と祝福の一つに「彼は悪いおとずれを恐れず、その心は主に信頼してゆるがない」とあるのももっともなことだ。新約にも「敵対する者どもに狼狽させられないのは、われらの勝利の印だ(ピリピ、1:28)」とある。

11月21日 今日の通読箇所 詩篇113篇1~9

「貧しきものの主」

この詩篇のテーマは「その栄光は天よりも高い」主に対する賛美だ。しかし同時にその栄光の主は「貧しいもの、乏しいもの、子を生まぬ女」など、弱く淋しいものを見そなわす。そして彼らを高く挙げて王侯と共に座しめ、また子なき婦人を多くの子の母として幸福な家庭を与えるなど、貧しく謙遜にして祈るものを顧みたもう恵み深い主だ。ここでキリストの「心の貧しいものは幸いである」という教えも思い合わされる、本当に素晴らしい詩篇だ。

11月22日 今日の通読箇所 詩篇114篇1~8

「すくいのよろこび」

ある年配の人が教会に来て「私は娘の喜びの理由を知りたくてきました」と言ったことがある。救われたクリスチャンには目立つほどの不思議な喜びがあるのだ。「イスラエルがエジプトを出たとき、異言の民を離れたとき」というのはクリスチャンが救われて、罪の、また世俗的な生活を離れたときという意味だ。その時主はクリスチャンのうちに住みクリスチャンは主のものとなる。この経験の結果、すべてみな新しく、感謝に踊るようにさえ見える。

11月23日 今日の通読箇所 詩篇115篇1~18

「真の神と偶像」

長く中国伝道をしていた宣教師に「日本は教育が進んでいるが、いったい高度の教育を受けた日本人は、人間が手で造った、室内に安置されたまま動かない神々が、祈りに答えてくれると本気で信じているのでしょうか。現代の日本に依然とそういう神々が祭られているのは不思議だ」と聞かれて困ったことがあった。皆さんどう思います？。



11月24日 今日の通読箇所 詩篇116篇1~19

「神の助け」

「あなたはわたしの魂を死から、わたしの目を涙から、わたしの足をつまずきから助け出されました(8節)」これはクリスチャンの日々の経険だが、詩篇のこの表現は美しい。「死からの助け」は救いを「涙から」は悲しみの中の助けを「足をつまずきから」は誘惑からの助けを言っていると思う。こういう神の恵みを思えばこそ、詩人は言う「わが魂よ、おまえの平安に帰るがよい。主は豊かにおまえをあしらわれたからである(7節)」と。

11月25日 今日の通読箇所 詩篇117篇1、2

「もろもろの国民」

これは一番短い詩篇で、しかも次の次には最も長い119篇が待っている。さてクリスチャンとして神を崇めるものは今も依然として少なく、神の愛と恵みに溢れた世界は神を知らない国や民族の手に泊められている。それ故戦争その他の悲惨が世界を覆っている。世界の国民が神を崇めるに至る様に我々は祈りつつ伝道に励み、また主の再臨の早からんことを、祈り待ち望むのだ。

11月26日 今日の通読箇所 詩篇118篇1~14

「蜂と火と」

11節に「彼らは蜂のように君を囲み、茨の火のように燃え立った」とあるが、日本の昔の伝説の「すさのをのみこと」も、迫害者のために蜂の室に追い込まれたり、野原で火をかけられて焼き殺されそうになったそうだ。私達も迫害やら、事故やら、誘惑やら、さまざまな危険に出会うことも多い。ただこの詩篇のように、絶えざる神の保護の中に守られて、お互いに毎日ことなく過ごせるのは本当にありがたいことだ。

11月27日 今日の通読箇所 詩篇119篇1~16

「清潔な生活」

これは詩篇だけでなく聖書全体で最も長い章だ。所々にある「アレカ」「ベス」などはヘブル語のアルファベットで、各グループがその文字ではじまっている。全章のテーマは「聖書」だ。11節に「あなたにむかって罪を犯すことがないように、心のうちにみことばをたくわえました」とクリスチャンの心をぴったり言っている。多くのクリスチャンホームの子供たちが不思議に誘惑から守られている秘密もこれだ。

11月28日 今日的通読箇所 詩篇119篇17~32

「聖書の奥義」

聖書の勉強は大切だが、聖書には常識では悟れない深い意味もある。また信じ従う心がない場合、聖書の真理はその人に隠されしまうこともある。キリストが「神は真理を智者学書に隠して幼子に現わされた」とおっしゃったのもその意味だ。どうか謙遜と信仰と服従をもって、聖書の奥義に対して我々の心が開かれるように。聖霊が心の目を開いて、聖書の隠れたすばらしい真理を味得させて下さるように祈ろう。

11月29日 今日的通読箇所 詩篇119篇33~48

「慕わしい聖書」

「見よ私はあなたのさとしを慕います」エドワード・グレーは「幸福の条件」の一つに「明確な道德基準を持っていること」を挙げている。車を運転していても、道を良く知っていれば快適なドライブ、安全な運転ができる。反対に道を探し探しの運転などは、近所迷惑も甚だしい。人生のドライブもまたしかり。それ故クリスチャンは聖書の教えを慕いそれを学ぶことを楽しむ。教会の集会にも喜んで出席するわけなのだ。

11月30日 今日的通読箇所 詩篇119篇49~64

「深夜の思い」

「62節」夜中にふと目を覚まして物を思うことも多い。来し方行く末を思うこともある。寝る前考えていた事に良いヒントが与えられることもある。またみことばを与えられ、その結果不安や思い煩いを主に委ねてぐっすり眠ることもある。あるいは励ましを受けて心が静かな興奮に誘われもする。ともあれ、みことばに心を守られているのは、朝でも昼でも夜中でも、本当に幸いだ。